

— 県道片岡栗東線特殊改良第1種工事に伴う —

芦浦遺跡発掘調査報告書

— 草津市芦浦町所在 —

Ⅱ

1988.3

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

— 県道片岡栗東線特殊改良第1種工事に伴う —

芦浦遺跡発掘調査報告書

— 草津市芦浦町所在 —

Ⅱ

1988.3

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりこんでいます。そうした中で文化財の保存と活用を図る施策のうち、開発に伴う埋蔵文化財の保護も重要な課題となっております。

先人の遺してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに県道片岡栗東線改良工事に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立ていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました。地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和63年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田 志農夫

例 言

1. 本書は、県道片栗線特殊改良第1種工事に伴う草津市芦浦遺跡の発掘調査報告書で、昭和61年度に刊行した第1冊につづく第2冊にあたる。昭和61年度に現地調査を実施し、昭和62年度に整理業務を実施したものである。
2. 本調査は滋賀県土木部道路課からの再配当により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
4. 本事業の事務局は次のとおりである。

昭和61年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部 正
課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林 博通
主任技師	用田政晴
管理係主任主事	山本徳樹

財滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄
事務局長	中島良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査二係長	大橋信弥
総務課長	山下 弘
主事	泉 良子
嘱託	滝岡弘子

昭和62年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部 正
課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林 博通
主任技師	用田政晴
管理係主任主事	山出 隆

財滋賀県文化財保護協会

理事長	吉崎貞一
事務局長	中島良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査二係長	大橋信弥
総務課長	山下 弘
嘱託	柴田弘子

5. 本書は大橋が執筆、編集した。
6. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会にて保管している。

目 次

序

例 言

1. はじめに	1
2. 調査の経過 ～日誌抄～	1
3. 調査の結果	3
A 検出遺構	3
B 出土遺物	10
4. おわりに	22
出土遺物説明表	23

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡位置図
第2図 トレンチ設定図
第3図 遺構全体平面図
第4図 調査区南壁・北壁断面実測図
第5図 出土遺物実測図(1) 1～9 (周溝状遺構) 10・11 (SD-4) 12～50 (SE-1、I・II層)
第6図 出土遺物実測図(2) 51～69、71、72 (SE-1、I・II層) 75 (SK-8) 76～77 (SX-7)、79～89 (SX-8)
第7図 出土遺物実測図(3) 90、91 (SX-10) 92～99 (T-1遺構面)、100～109 (T-2遺構面) 111、112、114、116 (T-2割溝内) 117 (T-2拡張部)
第8図 出土遺物実測図(4) 119 (T-2拡張部) 120～122 (不明) 123～125 (遺構面)
第9図 出土銅銭拓影 126・127 (周溝状遺構)

図 版 目 次

- 図版1 遺 構 上：調査前景 (西より)
下：SD1、SE1、SX1検出状況 (東より)
図版2 遺 構 上：第1調査区全景 (東より)
下：SD1断面 (西より)
図版3 遺 構 上：SD2、SK2、SX2・3近景 (西より)
下：SK1近景 (北より)
図版4 遺 構 上：周溝状遺構 SD3、SK3近景 (北より)
下：周溝状遺構 SK3、SX4近景 (東より)
図版5 遺 構 上：第2調査区全景 (西より)
下：第2調査区 (西半) 近景 (西より)
図版6 遺 構 上：SX5近景 (西より)
下：SX7近景 (西より)
図版7 遺 構 上：SK5断面 (南より)
下：第2調査区 (東半) 遠景 (西より)

- 図版8 遺構 上：第2調査区（東半）近景（東より）
下：第2調査区（東半）近景（西より）
- 図版9 遺構 上：SX8、SX9、SX10近景（西より）
下：SX7断面（西より）
- 図版10 遺物 周溝状遺構（001、003、007、008）SD4（010）
SE1、I・II層（014～016、019～021、027、028、
030）
- 図版11 遺物 SE1、I・II層（029、033、034、048、049、052）
SX10（088）T-1遺構面（093）T-2遺構面（112）不明
（122）周溝状遺構（126、127）
- 図版12 遺物 上：周溝状遺構（002、004、005、009）SD4（011）
SE1、I・II層（012、013、017、018、022～02
6、031、032）
下：SE1、I・II層（035～046、050）
- 図版13 遺物 上：SE1、I・II層（051、053～061、063、064）
下：SE1、I・II層（065～072、074）
- 図版14 遺物 上：SK8（075）SX7（076、077）SX8（078～082）
SX9（084～087）
下：周溝状遺構（006）SX10（089～091）T-1遺構面（09
2）T-2遺構面（111、113～115）T-2拡張部（117
～119）不明（120）
- 図版15 遺物 上：T-1遺構面（094、098）T-2遺構面（100～110）
下：遺構面（123～125）
- 図版16 遺構平面実測図(1)
- 図版17 遺構平面実測図(2)
- 図版18 遺構平面実測図(3)
- 図版19 遺構平面実測図(4)
- 図版20 各遺構断面実測図

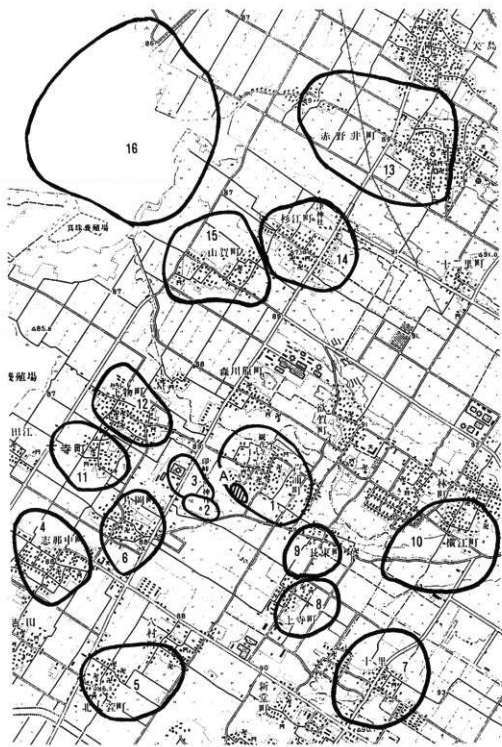
1. はじめに

本調査は、草津市芦浦町地先に所在する、芦浦遺跡について、県道片岡栗東線特殊改良第一種工事に先立って実施したもので、昨年度に続く第二次調査である。

本年度は、道路センターNo 3 +60からNo 4 +60まで約1,400㎡について発掘調査を実施したが、その結果、昨年度と同様、明確な建物跡の検出はなかったが、弥生時代から鎌倉時代の若干の遺構・遺物の検出があった。

2. 調査の経過 一日誌抄

- 昭和61年10月15日 調査開始、地区設定後西半分の掘削、遺構確認（土置場が確保できないため、半分で切り替えて調査をすすめることにした。）
- 10月16日 遺構確認および地形測量
耕土直下で溝状遺構・ピットなどを検出、埋め土の異なるものもあり、時期差を示すものか。
- 10月17日 遺構検出、検出状況の全体写真
東西を屈曲して流れる溝2条のほか、土坑・柱穴などを検出した。遺構はかなり削平されている。
- 10月20日 本日より作業員導入。
遺構掘り下げ開始SD1、SX1
調査区南断面実測
- 10月21日 SX2、SK3、SK1、SK2
掘削 平板図作成
- 10月22日 各遺構のセクションの断面図作成
及び写真撮影 SD2 暗渠の掘削 排水
- 10月23日 各遺構のセクションの断面図作成
及び写真撮影
暗渠排水掘削、周溝掘削（第1トレ）排水
- 10月24日 周溝状遺構掘削（第2トレ・第3トレ）と同開珪出土、セクションの断面図
及び写真 SX4掘削、排水
- 10月25日 朝から各遺構、そうじ、セクションはずし、周溝状遺構内より和同開珪出土
夕方全体の写真撮影、排水
- 10月27日 もう一度全体写真を撮る。
実測用の割りつけをする。排水
- 10月28日 平面図開始、排水
- 10月29日 午前中平面図完成
午後、レベル記入（機械高88.400）排水
- 11月5日 排水、埋め戻し（切りかえしのため）
- 11月6日 調査再開、遺構確認
- 11月7日 遺構確認続行
- 11月8日 遺構確認続行
- 11月10日 昨日の雨によって朝から排水作業
遺構、暗渠掘削開始



A 調査地点 1 芦浦遺跡 2 印岐志呂神社古墳群 3 檜皮堂遺跡 4 志那中遺跡
 5 北大菅遺跡 6 片岡遺跡 7 十里遺跡 8 上寺遺跡 9 長東遺跡 10 横江遺跡
 11 下寺遺跡 12 下物遺跡 13 赤野井遺跡 14 杉江遺跡 15 山賀遺跡 16 赤野井高遠遺跡

第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

- 11月11日 遺構、暗渠、掘開
SX5、SK6、SK5、SX7、SD4
断面の分層
相変わらず暗渠排水から水がよく湧き出ているためポンプ排水
- 11月12日 排水
遺構(SD5)、暗渠の掘開
平板図を作成
各遺構のセクション断面図作成
- 11月13日 排水
トレンチ拡張、掘り下げ、遺構確認
- 11月14日 T-2の断面図作成
SX8、SX9 掘開、排水
- 11月15日 SX8、SX9、SX10掘開
排水
SK7、SK8、断面図作成
- 11月17日 SX9、SX10を掘下げた。排水一部清掃及び白線マーク(遺構面の高い所)
- 11月18日 朝から排水し、第2トレンチの清掃を始める。
全景写真撮影、その後実測用の割りつけを行なう。
- 11月19日 割りつけを行ない、その後実測図の作成、排水
- 11月20日 図面作成、排水
- 11月21日 実測図完成、レベル記入(機械高88.400) 排水

3. 調査の結果

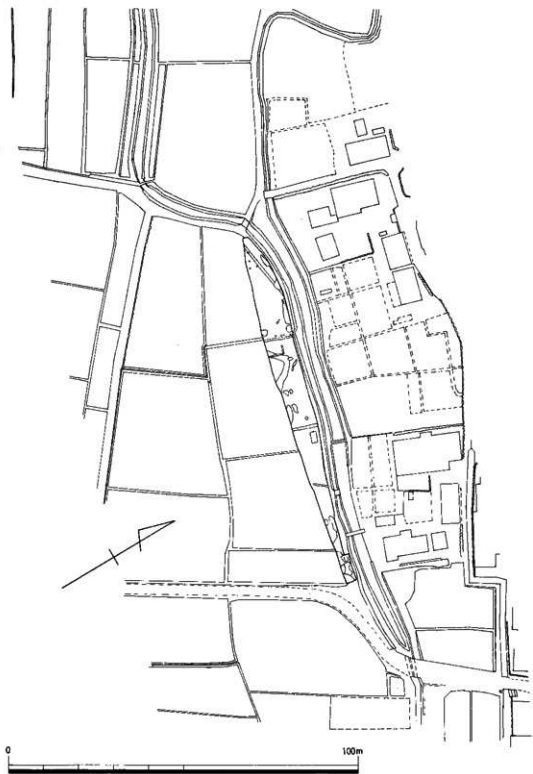
A. 検出遺構

(1) 基本土層

昨年度と同様、耕作土(青灰色粘土)と、床(茶褐色砂質土)を30~40cm掘削すると、暗黄褐色砂質土を主体とする地山面が露見する。遺構の大半は、この地山面を掘削して構築されていた。

(2) 遺構の概要

調査区の幅が狭く、排土置場が確保できないため、調査区をはば二分して、西半と東半にそれ



第2図 トレンチ設定図

ぞれ排土を反転して、調査を実施した。なお、東端のみは、重機による表土掘削が不可能であったため、人力によって掘り下げた。

検出した遺構は、調査区の西半部と東端に集中しており、中央付近にL字形に屈曲する周溝状遺構が1基、西端付近に井戸跡1基が所在するほか、南北ないし東西流する溝跡3条、土坑7基、落ち込み10基、ピット若干などで、明確な建物跡は検出できなかった。

(3) 遺構各説

周溝状遺構

調査区のはほぼ中央で検出した、L字状に屈曲する溝状の遺構で、溝幅1.5m、深さ58cmをはかり、U字状を呈する。埋土はほぼ5層に分かれ、第1層が茶褐色粘質土、第2層が淡灰褐色荒砂土、第3層が灰褐色粘土、第4層が暗灰青色砂土、第5層が、灰青色粘質砂土であった。必ずしも周溝状を呈する確証はないが、西端の状態や屈曲があまりにも明確な90度を呈するところから、一応推定しておきたい。出土遺物は、多くないが、土器では、弥生土器、須恵器、陶器など10点ばかりで、ほかに、皇朝十二銭のうち和同開珎が2枚出土している。これらのうち、本来の遺構に伴うものは、弥生土器のみで、他は、後世の流入とみられ、この推定が正しければ、周溝状遺構は、弥生後期後半の方形周溝溝とすることができるであろう。

SD1

調査区の中央付近を、南北に直交して検出された溝跡で幅40cm、深さ9cmをはかる。埋土は暗灰褐色粘質土で、出土遺物としては、布疋瓦1点が知られるのみで、明確にはできなかった。

SD3

SD2の東4.0mに、ほぼ平行して南北流する溝跡で、幅27cm、深さ24cmをはかる。埋土は、第1層が青灰褐色粘土、第2層が灰褐色粘土で、出土遺物はなかった。ただ、周溝状遺構を切り込んで築造されており、それに後出することは間違いないところである。

SD4

SD3のさらに東21.0mに所在する溝跡で、SD2、SD3にはほぼ平行して、南北流するとみられる。幅65cm、深さ16cmをはかり、埋土は第1層が青灰褐色粘土、第2層が暗青灰褐色粘土であった。出土遺物は、多くないが、土師器皿2点のみ図示できた。13世紀後半代のものであろう。

SD5

SD4の東17.5mを南北流する溝跡で、幅40cm、深さ13cmをはかる。埋土は茶褐色粘土で、出

土遺物はなかった。

SE1

調査区の西寄り北端に、南半分のみを検出した、直径3.25m、深さ33cmの井戸跡である。埋土は、ほぼ3層に分かれ、第1層が青灰褐色粘土、第2層が暗青灰褐色粘土、第3層が青灰色粘土であった。出土遺物は、比較的多く、61点を数える。黒色土器碗、土師器皿、土師質土器、瓦質土器、輸入陶磁などで、13世紀後半代に比定される。

SK1

SD2の西に接して所在する土坑で東西1.6m、南北1.8m、深さ20cmをはかり、埋土は、第1層が淡茶灰色砂質土、第2層が暗灰褐色砂土であった。出土遺物はなく、時期は明確にできなかった。

SK2

SK1の北3.2mに所在する長円形の土坑で、東西4.0m、南北42cm、深さ12cmをはかる。埋土は暗青灰色粘土で、出土遺物はなかった。

SK3

周溝状遺構の北コーナーを切り込んで築造された、東西82cm、南北1.2m、深さ11cmをはかる、楕円形の土坑である。埋土は茶灰色粘土で、出土遺物はなかった。

SK4

調査区の中央、SX5の北に接して所在する長円形の土坑である。東西1.5m、南北70cm、深さ12cmをはかり、埋土は、第1層が暗茶褐色砂質土、第2層は、暗青灰色砂土であった。出土遺物はなかった。

SK5

SK4の東7.5mに所在する、直径70cm、深さ21cmの円形土坑である。埋土は、第1層は黄褐色粘土、第2層は暗青灰褐色粘土で、出土遺物はなかった。

SK6

調査区の東はして検出した楕円形の土坑で、東西1.7m、南北1.1m、深さ9cmをはかる。埋土は、暗灰青褐色粘土で、出土遺物はなかった。

SK7

SK6の北に接して所在する、楕円形の土坑で、東側は沼沢地で、いまひとつ明確ではない。東西1.8m、南北1.15m、深さ10cmをはかり、埋土は青茶灰色粘土で出土遺物はなかった。

SK8

SK7の東9.5mに所在する1辺1.5m、深さ13cmをはかる、方形土坑である。埋土は黄灰青色粘土で、釜とみられる土師質土器1点のみを図示できた。

SX1

調査区の西端に所在する、不整形の落ち込みである。東西3.2m、南北85cm、深さ8cmをはかり、埋土は灰茶色粘土であった。出土遺物はなく、時期も明らかにできなかった。

SX2

SE1の東に所在する、浅い方形の落ち込みである。東西7.5m、南北1.5m以上、深さ18cmをはかり、埋土は淡茶褐色粘土であった。出土遺物はなかった。

SX3

SK2の東に接して所在する、直径3.0m、深さ68cmの円形の落ち込みである。埋土は第1層が茶灰色粘土、第2層が黄灰色粘土、第3層が灰黄色粘土、第4層が灰褐色粘土で、出土遺物はなかった。

SX4

SK3の東に東西に細長くのびる、溝状の落ち込みである。長さ3.2m、幅60cm、深さ24cmをはかり、埋土は第1層が茶灰色粘質土、第2層が青灰褐色砂質土、第3層が灰青色砂土であった。出土遺物はなかった。

SX5

SK4の南に接して所在する、不整形の落ち込みである。東西1.5m、南北1.2m、深さ17cmをはかり、埋土は第1層が暗茶褐色砂質土、第2層が暗灰色砂質土であった。出土遺物はまったくなかった。

SX6

SX5の東5mに所在する、東西4.6m、南北2m、深さ16cmの長楕円形の落ち込みである。埋土は灰褐色粘質砂土で、出土遺物はなかった。

SX7

SX6の北に所在する、東西2.6m、南北1.0mの不整形の落ち込みである。埋土は灰褐色粘質砂土で、須恵器坏蓋(76)土師器皿(77)各1点の出土があった。

SX8

調査区東端で検出した、不整形の落ち込みで、東西2.3m、南北1.3m、深さ30mをはかる。北にSX10、東にSX9が接して所在しており、埋土は暗紫色粘土であった。出土遺物は、黒色

土器碗(78)、東播系の須恵型土器鉢(79)、土師質、瓦質の羽釜類(80~82)などで、おおよそ、13世紀後半代のもものとみられる。

SX9

SX8の東に接して所在する。円形の落ち込みの一部である。径4.6mのみを検出しただけで、深さは29cmをはかる。埋土は、暗灰褐色砂質粘土で、出土遺物は土師器皿(83~85)、瓦質羽釜類(86、87)などで、13世紀後半代のものであった。

SX10

SX8、SX9と重複して所在する、不整形の落ち込みで、現存長で東西3.8m、南北2.4m、深さ32cmをはかる。埋土は暗灰褐色砂土で、出土遺物は土師質の羽釜類(88~90)、輸入青磁碗(91)などで、12世紀から13世紀代のものであった。

B. 出土遺物

各遺構および遺構面から出土した遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・黒色土器・土師質土器・瓦質土器・中世須恵器・岡原陶器・輸入陶磁器・国産陶磁器などの土器類と土鍾や砥石などの土製品・石製品のほか、銅銭2点などがみられる。このうち、土器類、土製品で図示或は写真を掲載したものは総数127点をかぞえ、その中でも、SE1出土品が61点と半数を占めている。

(1) 弥生土器

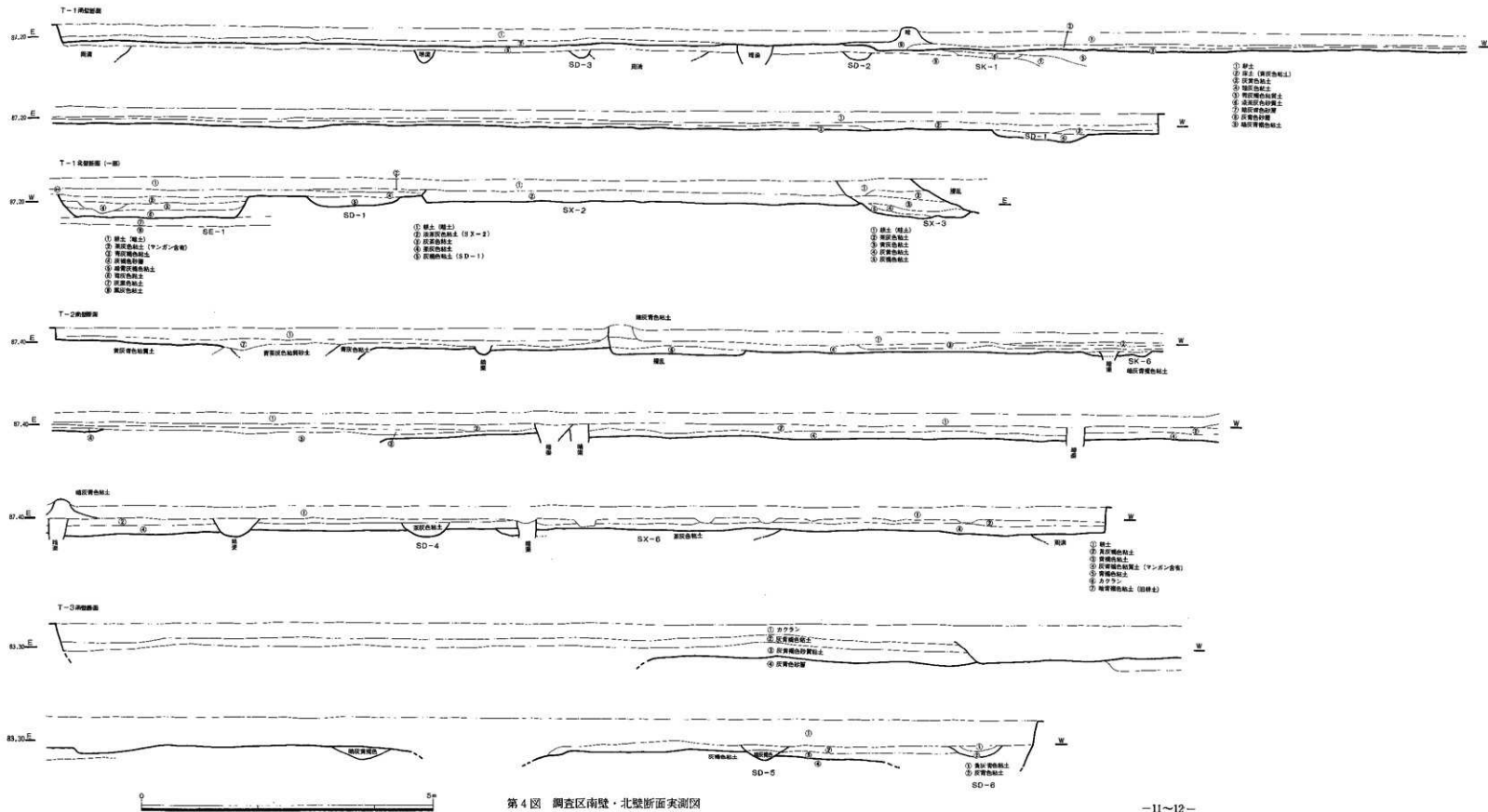
周溝状遺構より弥生土器6点の出土があった。器種は壺、高坏で、壺は口縁の形態よりA・B・Cとした。

壺A (1) 「く」字に外反し、ラッパ状に開く口縁部、内外面とも、磨滅が著しく、調整等は明らかでない。

壺B (2) 短かく、ゆるやかに外彎する口縁部で、内外面とも、ハケ目調整を加えている。休部の形状が不明であるが、短頸壺になる可能性が大きい。

壺C (3) ゆるやかに内彎して、外上方にのびる口縁部で、内外面ともヘラミガキで調整するが、これも磨滅が著しく、全様は明らかでなかった。

高坏(4~6) いづれも、高坏の脚柱部破片で、「ハ」字状に裾の開くものとみられる。外面は、一部磨滅の著しいものもあるが、丁寧なヘラミガキにより調整し、内面にはしぼり痕が残



第4図 調査区南壁・北壁断面実測図

る。

以上、これらは、必ずしも、良好な状況で出土したものではないが、その形態や、成形手法からみて、弥生後期末から庄内併行期にかけての資料とみられる。ただ、この時期の土器の変遷については、現在のところ、必ずしも明確になっているとは言えず、詳細は今後の検討にまちたい。

(2) 須恵器

各地点より、坏蓋・坏身・細頸壺とみられるものが各1点出土している。いずれも、遺構に伴うものではなく、混入の可能性の大きいものである。

坏蓋 76 坏蓋の天井部破片とみられる。天井部外面は、ヘラケズリにより、丁寧に仕上げている。

坏身 88 高台を持たない坏身の底部破片と考える。平底を呈し、やや厚い器壁をもっているところから、坏身というより、壺の底部になる可能性もある。

細頸壺 77 細頸壺の体部破片とみられる。小型品で、器壁もかなり薄く、腹部最大径に、一条の沈線めぐらす。体部外面上半には、一部自然輪がみられた。

(3) 土師器

SE1を中心に大量の土師皿が出土している。土師質の羽釜類は、別途に扱い、ここでは、土師皿のみをとり上げる。土師皿には、その法量より、大・中・小の3タイプに、大きく分類されるが、大皿は4点のみ、中皿は2点で、小皿が大半を占める(22点)。土師器は、口縁部が、ゆるやかに内彎するものをA、口縁端部を内側に巻きこむようにおさめるものをB、体部と口縁部が、やや屈曲して区別できるものをC、体部と口縁が明確に屈曲して区別されるものをDとした。

大皿A 12 口径が13cm前後で、やや上底気味の底部をもち、口縁部はゆるやかに内彎して、端部を丸くおさめている。

大皿C 77 小破片のため、口径については若干疑問が残るが、口縁端部が少し外反気味に引き出されている。

大皿D (83・84) 平坦な底部から、口縁部は直線的に外上方にのび、明確な屈曲がみられる。いずれもSX9の出土で、他のものとは、やや時期差をもつものとみられる。

中皿A (18) 口径が10.5cmをはかり、口縁部は、ゆるやかに内彎している。

中皿B (10) 口径が9.5cmで、口縁端部がやや内側に巻き上げられるような形態をとっている。

小皿A (14~19) 口縁部が、ゆるやかに内彎するタイプで、底部は不安定な丸底気味のもの、上げ底気味のものがある。

小皿B (20~24, 29, 93) Aにくらべ、口縁端部を、やや内側に巻き込むような形態をとる。底部は平坦なものが多いが、やや上げ底気味のものも含む。

小皿C (11・25~28・30~32・100) 口縁部と底部の境がやや屈曲して明確なほか、口縁部は直線的に外上方にのび、端部がやや外反気味のものも認められた。底部は、ほとんど安定した平底のものであった。

(4) 黒色土器

SE1を中心に、黒色土器が多数出土している。すべて碗で、1点のみ小椀とみられるものもあるが、すべて口径12~16cm前後の内黒の塊ばかりである。口縁部の形態よりA・B・Cの三タイプに分け、底部についても、高台の形態よりa、bの二タイプに大別し、それぞれa₁、a₂、b₁、b₂に細分した。

小椀 (85) 口径9.4cmと、一般的な黒色塊より、一回り小さいところから小椀としたが、小破片のため、若干問題は残る。一般に黒色碗で小型のものは、古い時期に多いようである。

塊A (33~37, 43) 口縁、体部が、ゆるやかに内彎するもので、Bに比較して、やや深い碗である。口径が13.5~15cm前後、器高が4.5cm前後となるものである。粗雑な暗文をもつものと、全く暗文を施さないものがあり、b₂の底部をもつものが1点ある。

塊B (38~42, 45, 50) 塊Aに比較して、やや浅い碗で、口縁端部が、少し外反する例も、いくつみられる。口径13cm~14cm前後が主流で、粗雑な暗文をもつものと、全く持たないものが半数ずつを占めており、器高も4cm弱のものが大半であった。底部の接続する例はなかった。

塊C (44~49) 口縁、体部が比較的直線的に外上方に伸びるタイプで、浅い碗が多い。大半が暗文の手法を失っており、底部の接続するものではa₂のものが知られている。

底部a₁ (51) 比較的大きい台状の高台をもつもので、出土例は1点のみであった。

底部a₂ (57, 59~64) 小型の台形を押しつぶしたような形態をとる高台をもつものである。

底部b₁ (58) 比較的大型の、断面三角形の高台をもつもので、出土例は1点のみであった。

底部b₂ (52~56, 78, 94, 95) 小型の断面三角形の高台をもつものである。

以上みたように小椀1点、椀Aが6点、椀Bが7点、椀Cが6点と、底部a₁が1点、a₂が7点、b₁が1点、b₂が8点で、このうち小椀がSX9、底部b₂の1点がSX8、底部b₂の2点が遺構面出土で、残りすべてSE1の出土品である。SE1の埋積層序は、必ずしも一律でなく、一応、I・II層に分けて取り上げたが、大きな差異はなく、ほぼ一括とみて間違いないようにみられる。このことは、高台が一部を除き、小型化していることからもうかがえるが、それとともに、椀B、椀Cのように、小型化し浅椀化していることも注意される。さらに、椀A、椀Bでは、いまだ半数近くが粗い暗文を残すのに対し、椀Cでは、全く暗文がみられないことも、これらの黒色土器椀の傾向を示すものであろう。これらを、黒色土器椀の大まかな変遷に対応させるなら、いまだ粗い暗文を大半に残している、手原遺跡SD-6の一群に後出する位置が推定され、実年代としては、瓦器椀のそれを参照するなら、13世紀中葉から後半に該当させることができると考える。

(5) 土師質、瓦質土器

土師質と瓦質の足釜と釜が、比較的多く出土している。口縁部の形態より、足釜はA・B・C・Dの4タイプ、釜はA・B・Cの3タイプに分類した。

土師質足釜A (66, 90, 102) 口縁部が内傾して大きく内彎、端部を内側に巻き込むような形態のものもある。口縁外面はナデ調整、内面は横方形のハケ目がのこる。

土師質足釜B (67) 口縁部はAと同じように内傾するが、ほぼ直線的にのびる。内外面とも、丁寧にナデ調整を加えている。

土師質足釜C (68) 小破片で、必ずしも明確でないが、口縁部の内傾が、やや小さいものもある。

土師質足釜脚部 (121) 断面円形の脚で、着地部がやや内彎している。

土師質釜A (88, 89, 101) 口縁部が、ほぼ直立するもので、端部は平坦におさめている。つばは横方形にのびる。

土師質釜B (115) 口縁部は、ほぼ直立して、端部がやや内彎のもの。

土師質釜C (85) 口縁部がやや外傾気味に直立するもの。

瓦質足釜A (96) 口縁部が大きく内傾し、ゆるやかに内彎するもの。

瓦質足釜B (113, 114) 口縁部が直線的に内傾するもの。

瓦質足釜D (88) 口縁部が長く直線的に内傾してのびるもの。

瓦質足釜脚部 (69, 82, 87, 103) 断面円形の脚部。

瓦質釜A (81, 86, 116) 口縁部が直立ないし、やや内傾するもの。端面は平坦にするものと、丸くおさめるものがある。

(6) 須恵質土器

東播系とみられる、須恵質土器が4点出土している。いわゆる片口鉢になるものとみられるが、口縁部の形態により、A・Bに分類した。

鉢A (79, 97, 111) 口縁端部を肥厚させて、外傾する面をもつもの。口径は22~25cm前後である。

鉢B (112) 口径33.2cm、器高13.9cmの片口鉢で、口縁部は、ほとんど肥厚せず、端面は平坦におわっている。

いずれも、明確な遺構から出土したものではないが、この種の例としては、13世紀代のものとみられる。

(7) 輸入陶磁器

各遺構より、青磁・白磁が若干出土している。大半が碗で、皿は1点のみであった。

青磁碗A (91, 117) 断面三角形の高い高台をもつ碗底部で、高台の外側に一部施釉が及んでいる。大宰府などの資料を参照するなら、12世紀から13世紀に類例の多いものであろう。

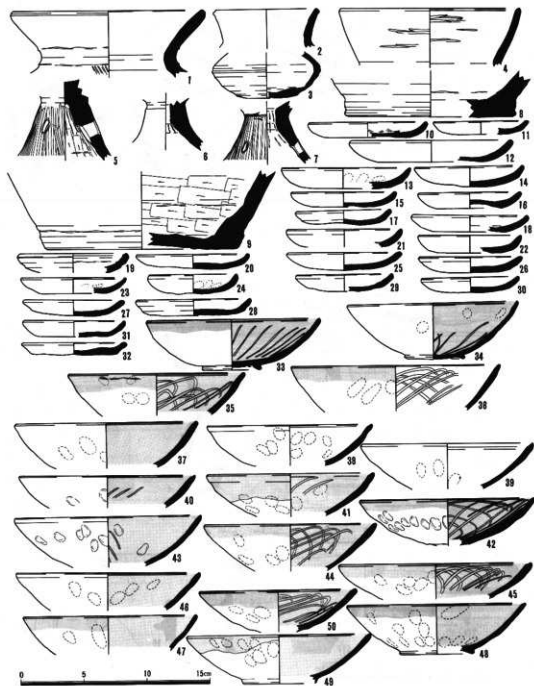
青磁碗B 72 断面台形の安定した高台をもつ底部で、高台の内側を除いて明緑灰色の釉を施す。大宰府の資料によると、13~14世紀のものに類例がある。

青磁碗C 99 断面長方形の長い高台をもつ底部で、高台の中段から上に淡緑灰色の釉を施す。14世紀代のものであろう。

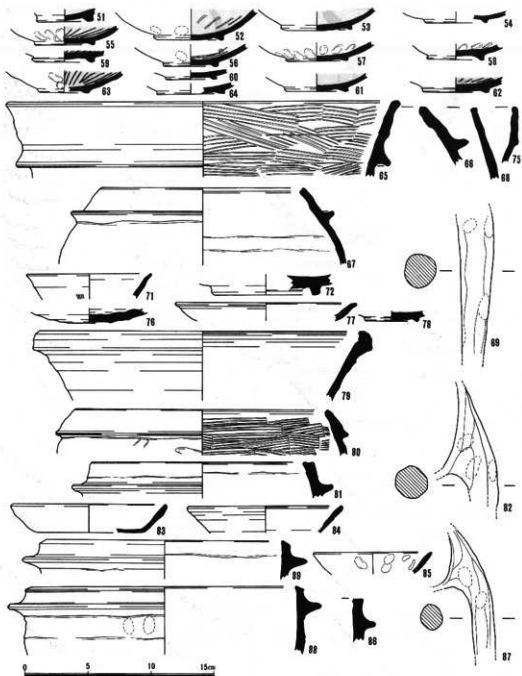
青磁碗D 71 直線的に外上方にのび、端部が短かく外反する。淡緑灰色の釉が施される。13世紀から14世紀代にみられるものである。

青磁皿 (105) 内面に、扇形文を展開させた、同安窯系の青磁皿で、14世紀後半代のものであろう。

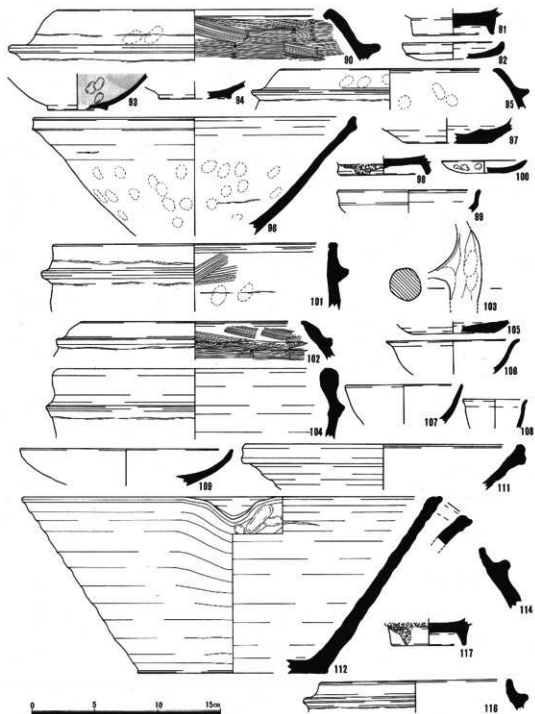
白磁碗 (106) ゆるやかに体部が内彎し、口縁部が外反して、やや外方に引き出す形態をとり淡灰白色の釉を施す。一乗谷遺跡などの出土例を参照するなら、16世紀代と考えられる。



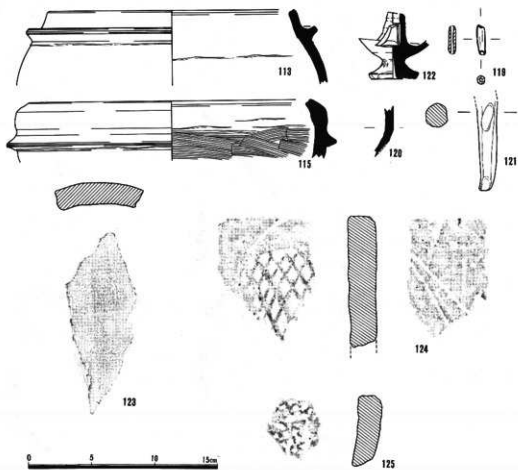
第5圖 出土遺物実測図(1) 1~9 (周溝状遺構) 10・11 (SD-4) 12~50 (SE-1、I・II層)



第6图 出土遺物実測図(2) 51~69、71、72 (SE-1、I・II層) 75 (SK-8) 76~77 (SX-7)、79~89 (SX-8)



第7图 出土遗物实测图(3) 90、91 (SX-10) 92~99 (T-1 遺構面)、100~109 (T-2 遺構面) 111、112、114、116 (T-2 側溝内) 117 (T-2 拡張部)



第8図 出土遺物実測図(4) 119 (T-2 拡張部) 120~122 (不明) 123~125 (遺構面)

(8) 国産陶磁器

国産陶磁器としては、地元信楽のほか、瀬戸、伊万里などがみられる。そのほとんどが遺構に伴うものでなく、時期的にも近世・近代のものが多い。

信楽壺 (9) 厚い器壁の底部で、安定した平底を呈する。淡赤褐色を呈し、1～3mm前後の長石、石英粒を含む。内外面ともナデ、桃山期(16世紀代)のものであろう。

信楽鉢 (8) やや上げ底気味の安定した底部で、体部は斜上方に直線的にのびる。厚い器壁で、内面には条線がないので、摺鉢にはならないと思われる。暗灰緑色を呈し、胎土は0.5～2.0mmの長石、石英を含んでいる。これも、桃山期の大窩谷窯のものに類例がある。

信楽甕 (104) 長石、石英を多く含んだ胎土で、赤褐色を呈する堅緻な焼成の陶器で、近世から近代の信楽の製品とみられる。

染付壺 (107) 淡い紺色で、草花を文様化した染付で、伊万里系か、江戸前期ごろのものか。

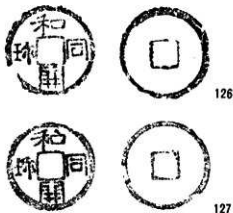
染付皿 (109) 藍色の濃淡で草花を文様化した染付けである。これも、江戸前期ごろの伊万里系のものか。

染付杯 (108) 青灰白色の地に藍色の草花を文様化した染め付けである。江戸期の伊万里系のものであろう。

瀬戸系壺 (92) 天目輪をかけた小型の壺とみられる。小破片で、必ずしも明確でないが、江戸期のものであろう。

瀬戸系仏具 (122) 天日輪のかかった、灯明台で、石英・長石を多く含むところから近世の信楽の製品である可能性も高い。

以上のほか、図示できなかった染付も、いくつかあるが、いずれも遺構に伴うものではなく、後世の流入品とすることができる。



第9図 出土銅銭拓影126・127(周溝状遺構)

(9) 土製品

土鉢が1点(119)出土している。径6cm前後で、長さ2.3cmの小型品である。

10 小 結

以上、簡単に紹介したように、今回の出土遺物の中で、遺構に伴うものとしては、周溝状遺構から出土した、弥生土器と、SE1に代表される、中世の集落に関連するものが大半であった。特に、SE1出土品は、量的にも、器種的にも、13世紀後半代の一括資料として、注目することができると思われる。

4. お わ り に

今回の調査は、掘進幅14m、延長100mという限定されたものであったが、弥生後期末とみられる方形周溝墓1基のほか、13世紀後半代に中心のある集落の一部（溝・井戸・土坑等）を検出することができた。そして、明確な遺構の検出はなかったが、和銅開珎2点や須恵器など、奈良時代の遺物の出土もあって、芦浦遺跡が、若干の断絶をもちつつも、弥生時代以来存続する集落であることが再確認できた。

また出土遺物では、今回調査の大半を占めたSE1の資料は、従来、良好な資料に恵まれなかった、13世紀後半代の日常雑器類のあり方を示すものとして、重要な位置を占めるものと考えられる。

出土遺物説明表

出土遺構	器種	器形	図版 番号	口径 (底径)	器高 (残存)	色調	胎土	焼成
周溝状遺構	弥生土器	壺 A	1	15.0	5.3	淡褐色	長石・石英の 砂粒含	良好
	弥生土器	壺 B	2	8.0	3.2	淡褐色	砂粒多含	良好
第1トレンチ	弥生土器	壺 C	3	14.2	4.7	淡乳褐色	砂粒を全体に 含む	良好
第3トレンチ	弥生土器	高坏 (脚部) 1	4	-	6.25	淡褐色	砂粒を全体に 含む	良好
第3トレンチ	弥生土器	高坏 (脚部) 2	5	-	4.1	淡褐色	長石・石英を 含む砂粒含	良好
第2トレンチ	弥生土器	高坏 (脚部) 1	6	-	5.0	淡褐色	長石・石英の 砂粒含	良好
第1トレンチ	須恵器	細頸壺	7	-	3.6	明灰青色	長石・石英含 精良	良好
第3トレンチ	信楽	鉢	8	15.0	6.2	暗灰褐色	長石・石英の 砂粒含	良好
第3トレンチ	信楽	壺	9	13.0	3.65	淡赤褐色	長石・石英の 砂粒含	良好
SD-4	土師器	中皿 B	10	9.4	1.2	淡乳褐色	長石等の砂粒含	良好
	土師器	小皿 C	11	7.4	1.5	淡乳褐色	クサリレキ含	良好
SE-1	I・II層	土師器	大皿 A	12	12.6	淡乳褐色	茶色のクサリレ キ含	良好
	I・II層	土師器	中皿 A	13	10.2	淡灰褐色	クサリレキ・ 砂粒含	良好
	I・II層	土師器	小皿 A	14	8.4	淡乳 褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
	I・II層	土師器	小皿 A	15	8.2	淡乳灰色	長石などの 砂粒含	良好
	I層	土師器	小皿 A	16	8.0	淡乳褐色	砂粒少々含む	良好
	I・II層	土師器	小皿 A	17	7.4	淡乳 灰褐色	長石などの 砂粒含	良好
	I・II層	土師器	小皿 A	18	9.2	淡茶褐色	全体に クサリレキ含	良好
	I層	土師器	小皿 A	19	8.4	淡乳 赤褐色	長石などの 砂粒含	良好
	I・II層	土師器	小皿 B	20	8.8	淡乳褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
	I層	土師器	小皿 B	21	9.0	淡乳褐色	砂粒含	良好

出土遠構	器種	器形	図版番号	口径(底径)	器高(残存)	色調	胎土	焼成
SE-1								
I・II層	土師器	小皿 B	22	8.0	1.4	淡乳褐色	クサリレキを含む	良好
I・II層	土師器	小皿 B	23	8.2	1.2	淡灰褐色	クサリレキ含	やや軟質
I・II層	土師器	小皿 B	24	6.8	1.6	淡褐色	蜜母がまばらにある	良好
I・II層	土師器	小皿 C	25	8.8	1.4	淡乳褐色	石英・長石の砂粒含	良好
I・II層	土師器	小皿 C	26	8.0	1.3	乳褐色	石英・長石の砂粒含	良好
I・II層	土師器	小皿 C	27	7.8	1.3	淡乳灰褐色	石英・長石などの砂粒含	良好
I層	土師器	小皿 C	28	9.0	1.3	淡乳橙褐色	石英などの砂粒含	良好
I・II層	土師器	小皿 B	29	(7.6)	1.4	淡橙褐色	クサリレキを含	良好
I層	土師器	小皿 C	30	7.6	1.3	淡乳灰褐色	石英などの砂粒含	良好
I・II層	土師器	小皿 C	31	8.0	1.3	淡赤褐色	クサリレキ含	良好
I・II層	土師器	小皿 C	32	8.1	1.0	淡乳赤褐色	石英・長石などの砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	椀 A	33	13.7 4.5	4.0	淡乳茶褐色	長石等の砂粒含	良好
I層	黒色土器	椀 A	34	13.4 4.5	4.4	乳褐色	石英・長石の砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	椀 A	35	13.9	3.3	乳白褐色	石英・長石の砂粒	良好
I・II層	黒色土器	椀 A	36	16.4	3.6	乳褐色	石英・長石の砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	椀 A	37	14.4	3.6	暗乳褐色	長石・黒蜜母等の砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	椀 B	38	13.0	3.2	乳褐色	石英・長石・クサリレキの砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	椀 B	39	13.6	3.6	淡赤茶灰色	石英・長石含微砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	椀 B	40	14.0	2.5	灰白色	砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	椀 B	41	13.2	3.4	暗乳褐色	石英・長石等の砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	椀 B	42	13.8	3.7	淡乳褐色	石英・長石の砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	椀 A	43	14.8	3.9	淡乳褐色	長石まばらに含	良好

出土遺構	器種	器形	図版 番号	口径 (底径)	器高 (残存)	色調	胎土	焼成
SE-1								
I・II層	黒色土器	碗 C	44	13.6	3.7	乳赤褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	碗 B	45	15.2	2.8	乳白褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	碗 C	46	14.4	3.0	淡乳灰色	細かい砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	碗 C	47	13.8	3.0	淡乳 白褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
I層	黒色土器	碗 C	48	14.0 5.6	4.0	白乳 橙褐色	石英などの 砂粒含	良好
拡張部	黒色土器	碗 C	49	14.5	3.9	乳白褐色	石英・クサリレ キの砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	碗 B	50	12.4	3.3	明乳褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
	黒色土器	碗 a 1	51	4.4	0.95	淡乳褐色	微砂粒・石英含	やや軟質
I層	黒色土器	碗 a 2	52	5.0	2.5	淡黄褐色	精良	良好
I・II層	黒色土器	碗 b 2	53	-	1.6	淡乳 赤褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	碗 b 2	54	4.9	0.9	淡乳褐色	石英・長石を含む	やや軟質
I・II層	黒色土器	碗 b 2	55	4.6	1.4	淡乳褐色	微砂粒・長石・ クサリレキ含	良好
I・II層	黒色土器	碗 b 2	56	4.2	1.8	暗褐色	砂粒・石英含	良好
I・II層	黒色土器	碗 a 2	57	4.6	1.5	淡乳 白褐色	長石・砂粒等含	やや軟質
I・II層	黒色土器	碗 b 1	58	4.5	1.2	淡乳褐色	精良	良好
I層	黒色土器	碗 a 2	59	4.6	0.9	淡乳褐色	微砂粒含	良好
I・II層	黒色土器	碗 a 2	60	3.8	0.7	淡褐色	微砂粒含	良好
I層	黒色土器	碗 a 2	61	4.8	1.4	暗乳褐色	長石の砂粒含	良好
I層	黒色土器	碗 a 2	62	4.9	1.2	白乳褐色	石英・長石・ クサリレキ含	良好
I・II層	黒色土器	碗 a 2	63	3.9	1.8	淡乳褐色	精良	良好
I層	黒色土器	碗 a 2	64	5.4	0.8	淡乳褐色	砂粒含	良好
I・II層	土師質 土器	釜 C	65	16.0	6.0	乳灰白色	砂粒含	良好

出土遺構	器種	器形	図版 番号	口径 (底形)	器高 (残存)	色調	胎土	焼成
SE-1	土師質 土器	足釜 A	66	-	4.6	淡赤 茶褐色	長石・石英を含	良好
I・II層	土師器 土器	足釜 B	67	16	6.1	灰白色	砂粒含	良好
II層	土師器 土器	足釜 B	67	16	6.1	灰白色	砂粒含	良好
I・II層	瓦質土器	足釜 D	68	14.7	5.7	灰黑色	砂粒含	やや 軟質
I・II層	瓦質土器	足釜脚部	69	-	-	淡灰 乳褐色	砂粒含	良好
	青磁	碗	70	-	-	明灰白色	精良	良好
I層	青磁	碗 D	71	9.8	2.0	淡灰 緑色釉	精良	良好
I層	青磁	碗 B	72	8.0	1.1	明緑 灰色釉	精良	良好
		-	欠番	-	-	-	-	-
I・II層	染付	碗	74	-	-	明灰白色	砂粒含	良好
SK-8	土師質 土器	釜	75	-	4.3	淡黄褐色	砂粒含	良好
SX-7	須恵器	坏蓋	76	-	-	淡赤 暗灰色	精良	良好
	土師器	大皿 C	77	14.4	1.4	淡褐色	クサリレキ含	良好
SX-8	黒色土器	碗 b1	78	4.1	0.8	白乳褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
	須恵器	鉢 A	79	25.8	5.5	暗紫 青灰色	長石粒含	やや 不良
	土師質 土器	足釜 C	80	20.0	3.6	淡橙色	砂粒含	良好
	瓦質土器	釜 A	81	17.6	2.9	淡灰褐色	砂粒含	良好
	瓦質土器	足釜脚部	82	-	9.4	明灰白色	石英等の砂粒含	良好
SX-9	土師器	大皿 D	83	12.2	2.3	淡乳 赤褐色	砂粒少量含	良好
	土師器	大皿 D	84	12.2	2.1	乳淡褐色	砂粒含	良好
	土師器	小碗	85	9.4	1.7	淡乳褐色	精良	良好
	瓦質土器	釜 A	86	-	3.4	黒色	石英含	良好
	瓦質土器	足釜脚部	87	-	-	淡茶褐色	石英・長石粒含	良好

出土遺構	器種	器形	図版 番号	口径 (底形)	器高 (残存)	色調	胎土	焼成
SX-10	土師質 土器	釜 A	88	21.0	5.4	乳灰色	長石の砂粒含	良好
	土師質 土器	釜 A	89	18.6	3.0	淡赤 茶褐色	精良	良好
	土師質 土器	足釜 A	90	11.8	4.1	暗赤褐色	石英・長石含	良好
	青磁	碗 A	91	6.4	2.1	青灰 白色釉	砂粒含	良好
T-1 遺構面	瀬戸	壺	92	11.2	1.8	青灰色	精良	良好
	土師器	小皿 B	93	8.0	1.3	乳灰褐色	砂粒含	良好
	黒色土器	碗 b ₁	94	4.6	2.9	淡乳褐色	長石など 微砂粒含	良好
	黒色土器	碗 b ₂	95	5.4	1.35	乳褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
	瓦質土器	足釜 A	96	17.1	3.25	黒褐色	石英・長石・黒 蜜母等の砂粒含	良好
	須恵器	鉢 A	97	25.4	9.4	淡灰色	石英・長石の 砂粒含	良好
	須恵器	坏身	98	-	1.9	淡赤灰色	砂粒含	良好
	青磁	碗 C	99	3.8	1.5	淡黄灰色	精良	良好
	T-2 遺構面	土師器	小皿 C	100	6.8	1.0	淡乳 赤褐色	精良
土師質 土器		釜 A	101	11.3	5.3	暗茶褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
土師質 土器		足釜 A	102	17.0	2.3	暗茶褐色	石英・長石	良好
瓦質土器		足釜脚部	103	-	-	暗茶褐色	石英粒含	良好
信楽		壺	104	11.4	5.6	赤褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
青磁		皿	105	6.4	0.95	淡青 緑灰色	精良	良好
白磁		碗	106	10.6	2.7	淡灰 白色釉	精良	良好
染付		碗	107	9.4	3.1	淡青 灰白色	精良	良好
染付		坏	108	5.0	2.3	淡青 灰色釉	精良	良好
染付		皿	109	16.8	2.9	淡青 灰白色	精良	良好

出土遺構	器種	器形	図版 番号	口 径 (底形)	器 高 (残存)	色 調	胎 土	焼 成
T-2 遠構面	染付	皿	110	-	-	淡灰青色	精良	良好
T-2 側溝内	須恵器	鉢 A	111	2.20	3.6	明青灰色	砂粒含	良好
	陶質土器	鉢 (片口) B	112	3.32 15.0	13.9	淡橙褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
	瓦質土器	足 釜 B	113	1.94	5.95	淡青灰色	砂粒含	良好
	瓦質土器	足 釜 B	114	-	5.2	淡灰 茶褐色	石英の微砂粒含	良好
	土師質 土器	釜 B	115	2.22	4.7	淡乳白色	砂粒含	良好
	瓦質土器	釜 A	116	15.0	2.5	暗茶褐色	石英・長石の 砂粒含	良好
	T-2 拡張部	青磁	壺 A	117	5.8	2.1	明灰白色	精良
不 明	瀬戸	壺	118	-	-	明灰白色	精良	良好
	土製品	土 鐘	119	0.6	2.3	淡 橙 色	精良	良好
	土師質 土器	釜	120	-	-	淡 褐 色	クサリレキ含	良好
	土師質 土器	足釜脚部	121	-	-	淡橙褐色	石英の微砂粒含	良好
	瀬戸	仏 鬘 具	122	-	5.3	茶 褐 色	精良	良好



調査前景（西より）



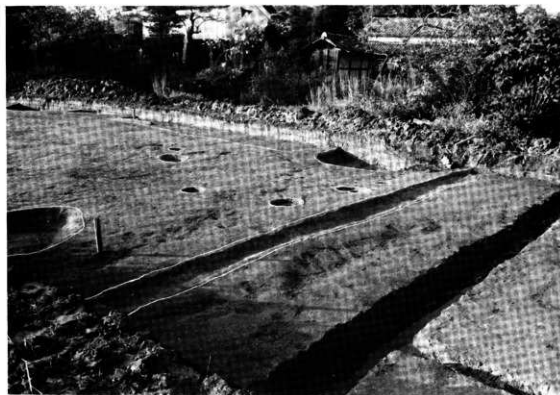
SD1・SE1・SX1検出状況（東より）



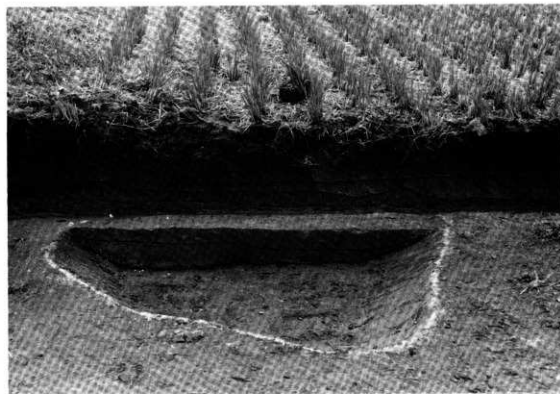
第1調査区全景（東より）



SD1断面（西より）



SD2・SK1・SX2・3近景(南より)



SK1近景(北より)



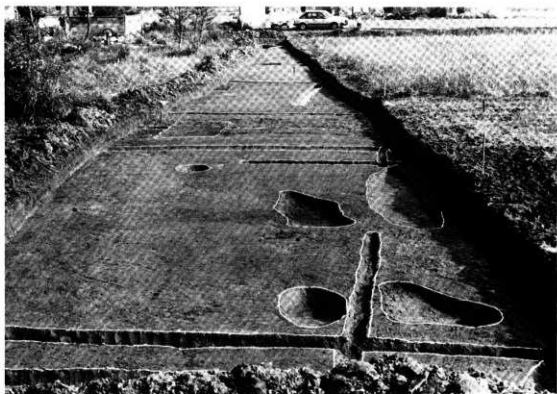
周溝状遺構・SD3・SK3近景(北より)



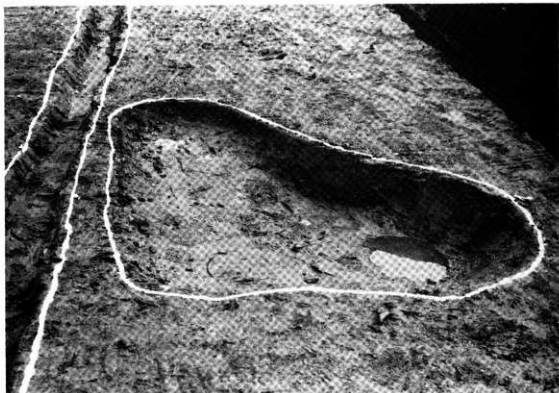
周溝状遺構・SK3・SX4近景(東より)



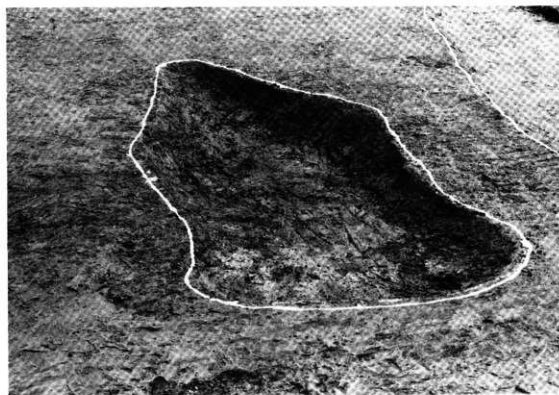
第2調査区全景（西より）



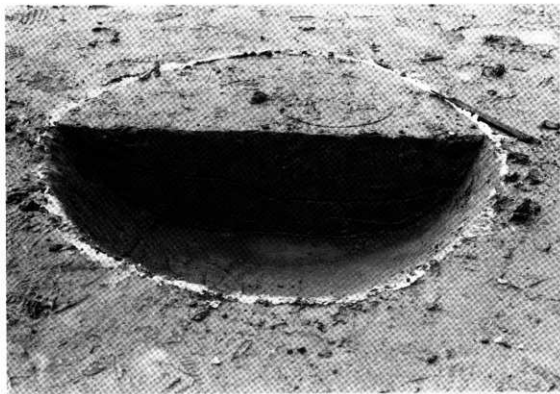
第2調査区（西半）近景（西より）



S X 5 近景 (西より)



S X 7 近景 (西より)



SK 5 断面 (南より)



第2調査区 (東半) 遠景 (西より)



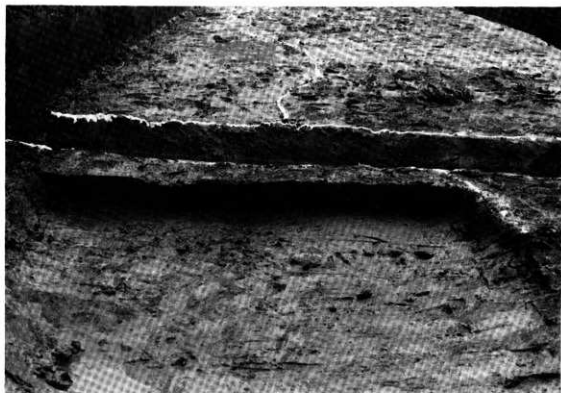
第2調査区(東半)近景(東より)



第2調査区(東半)近景(西より)



SX 8・SX 9・SX 10近景 (西より)



SX 7断面 (西より)



010.



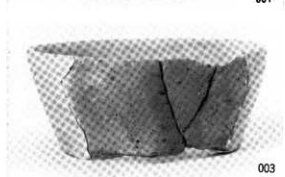
020



001



027



003



015



016



007



028



008



030



014



019



021

周溝状遺構 (001 . 003 . 007 . 008) S D 4 (010) S E 1 . I · II 層 (014 ~ 016 . 019 ~ 021 . 027 . 028 . 030)



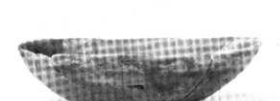
029



052



048



033



034



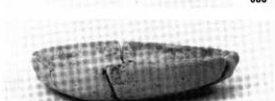
049



083



088



092



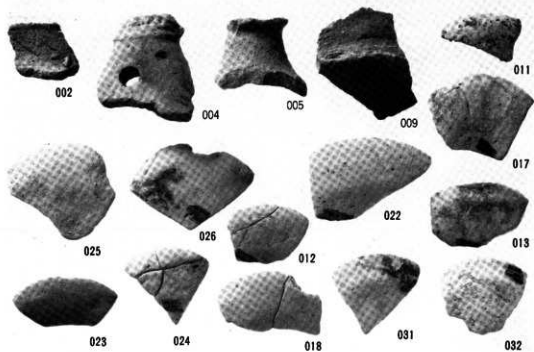
112



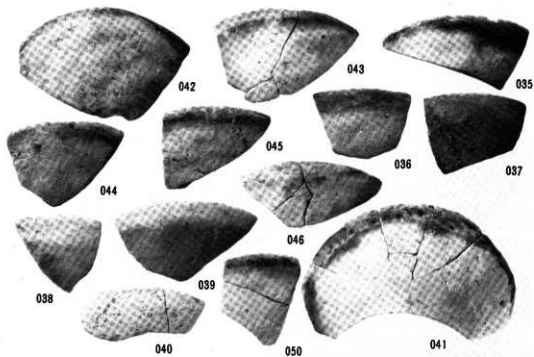
126

127

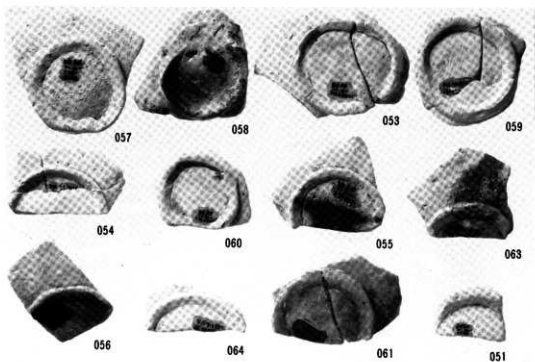
SE 1 . I · II 層 (029 . 033 . 034 . 048 . 048 . 049 . 052) SX 10 (088) T-1 遺構面 (093)
T-2 遺構面 (112) . 不明 (122) 周構狀遺構 (126 . 127)



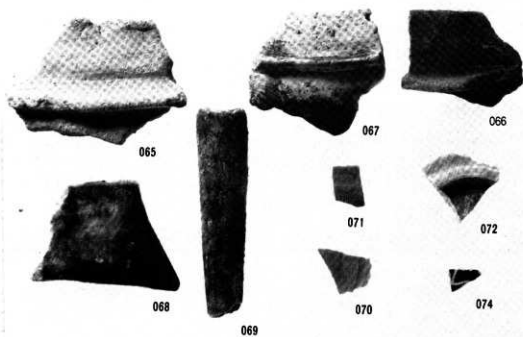
周溝状遺構 (002 . 004 . 005 . 009) SE 4 (010) SE 1 I・II層 (012 . 013 . 017 . 018 . 022~026 . 031 . 032)



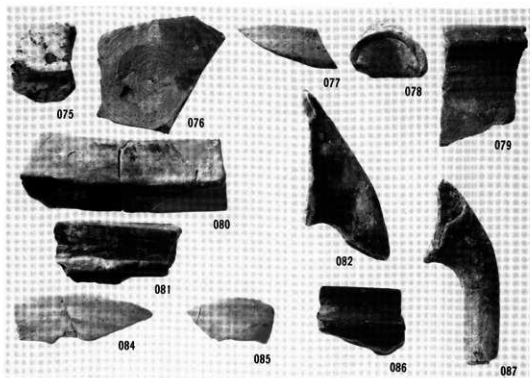
SE 1 I・II層 (035~046 . 050)



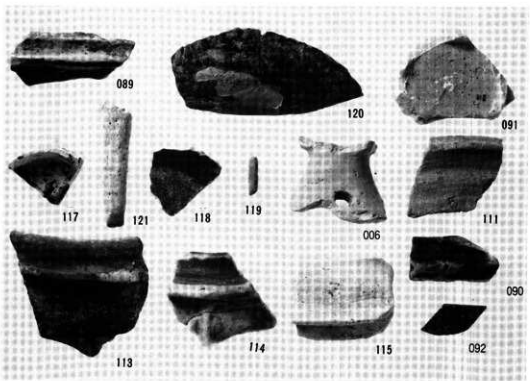
SE 1 I・II層 (051・053~061・063・064)



SE 1 I・II層 (065~072・074)

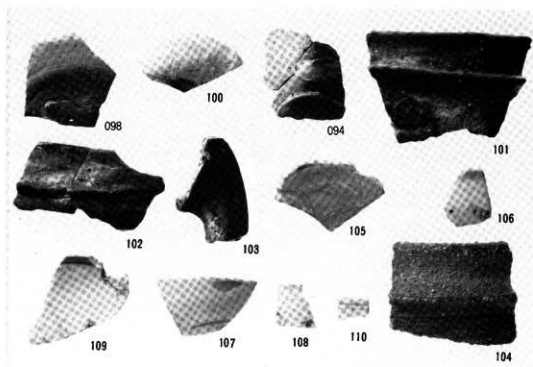


SK 8 (075)、SX 7 (076、077) SX 8 (078~082) SX 9 (084~087)

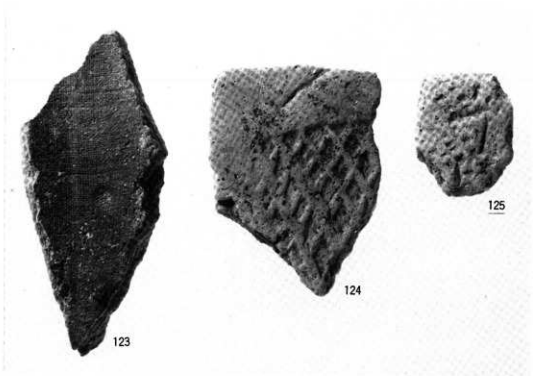


周溝状遺構 (006)、SX 10 (SX 10 (089~091)

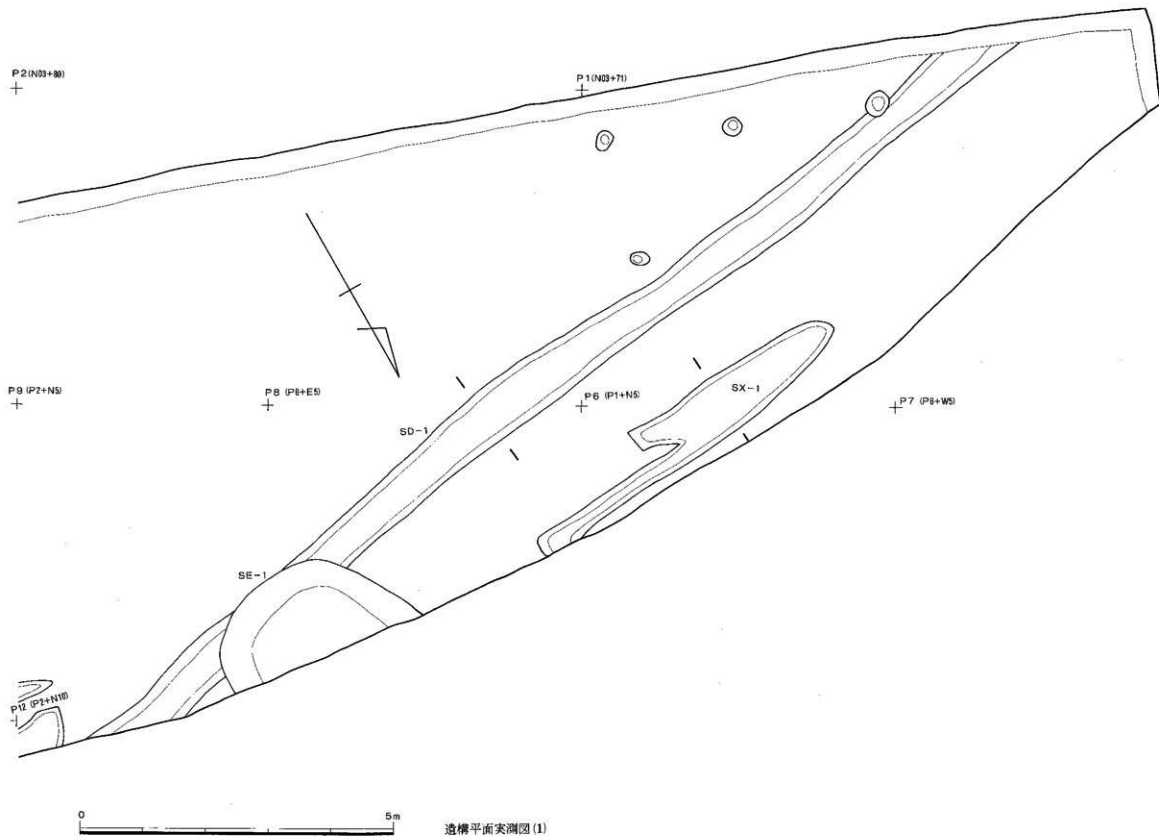
T-1 遺構面 (092) T-2 遺構面 (111、113~115) T-2 拡張部 (117~119不明 (120)



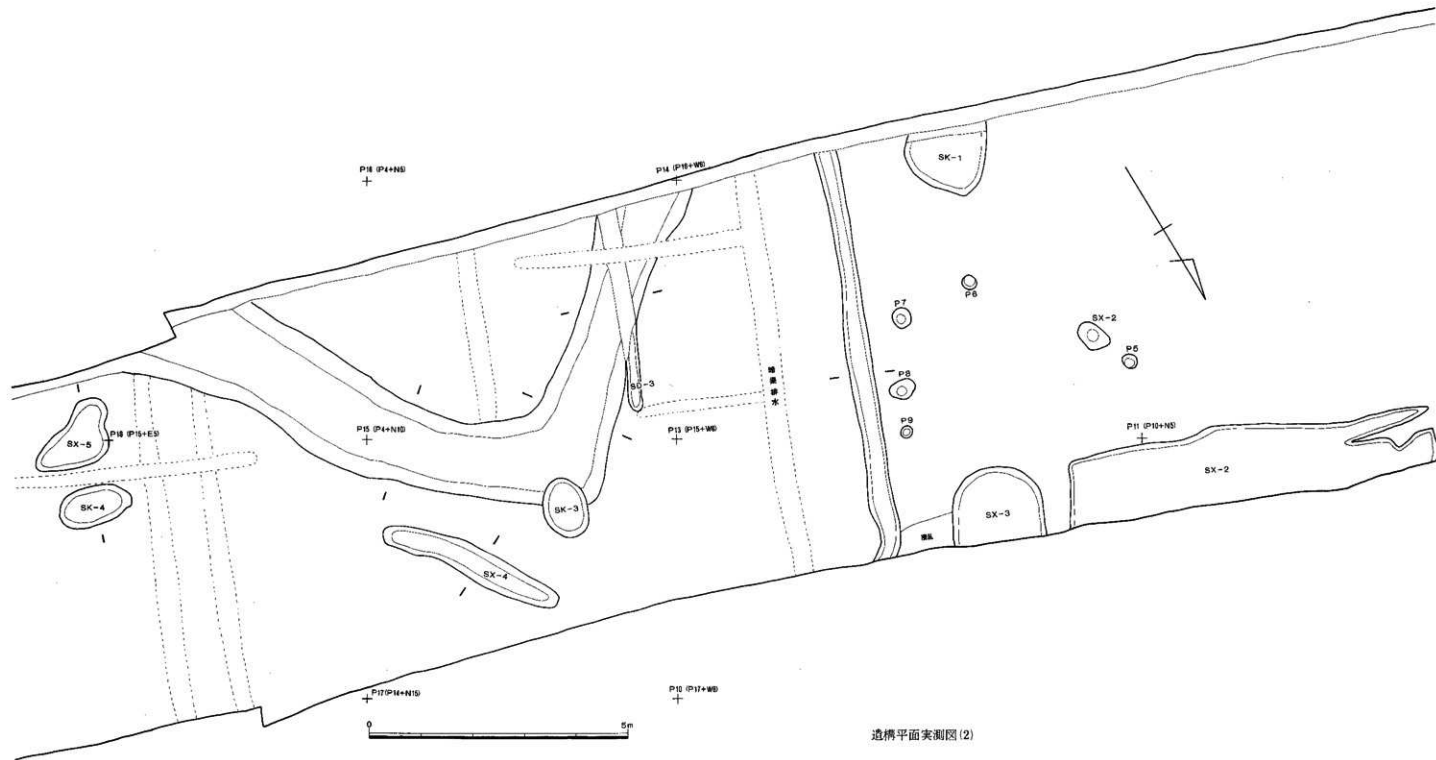
T-1 遺構面 (094, 098)、T-2 遺構面 (100~110)

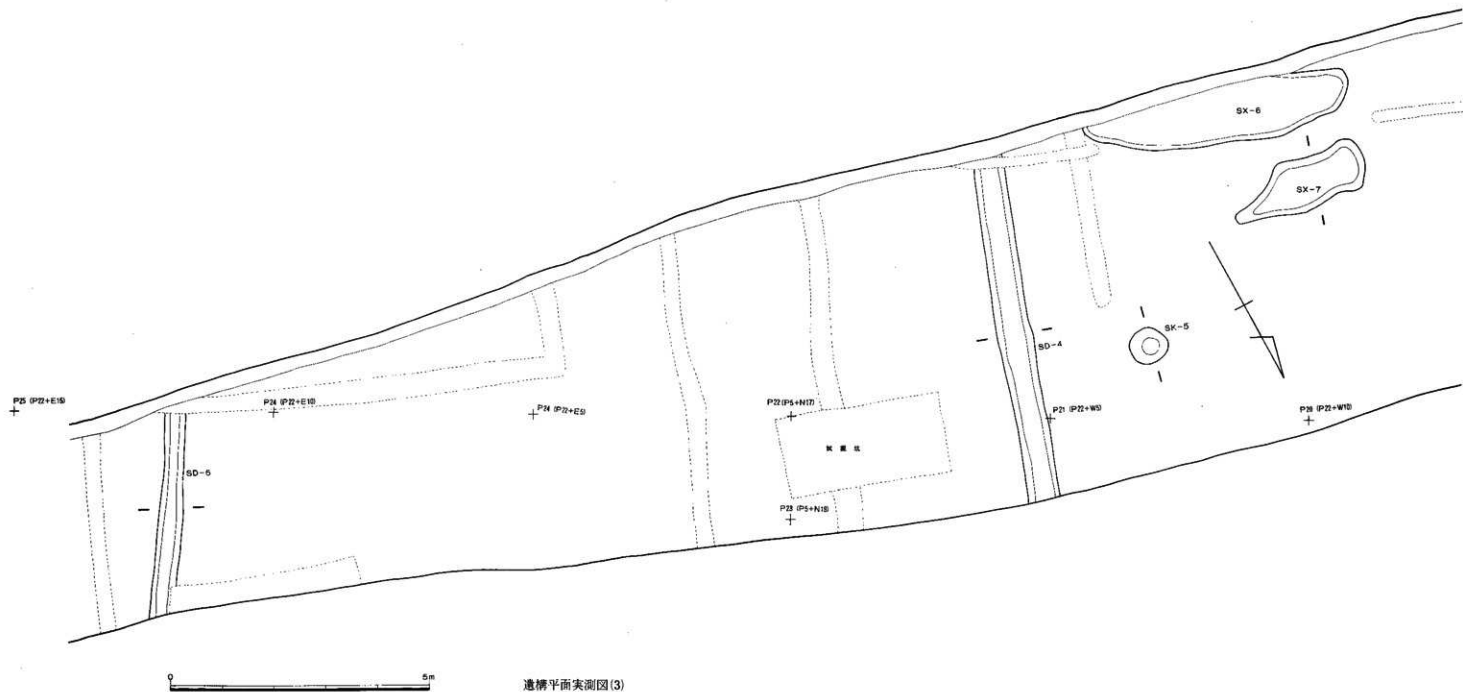


周溝狀遺構面 (123~125)

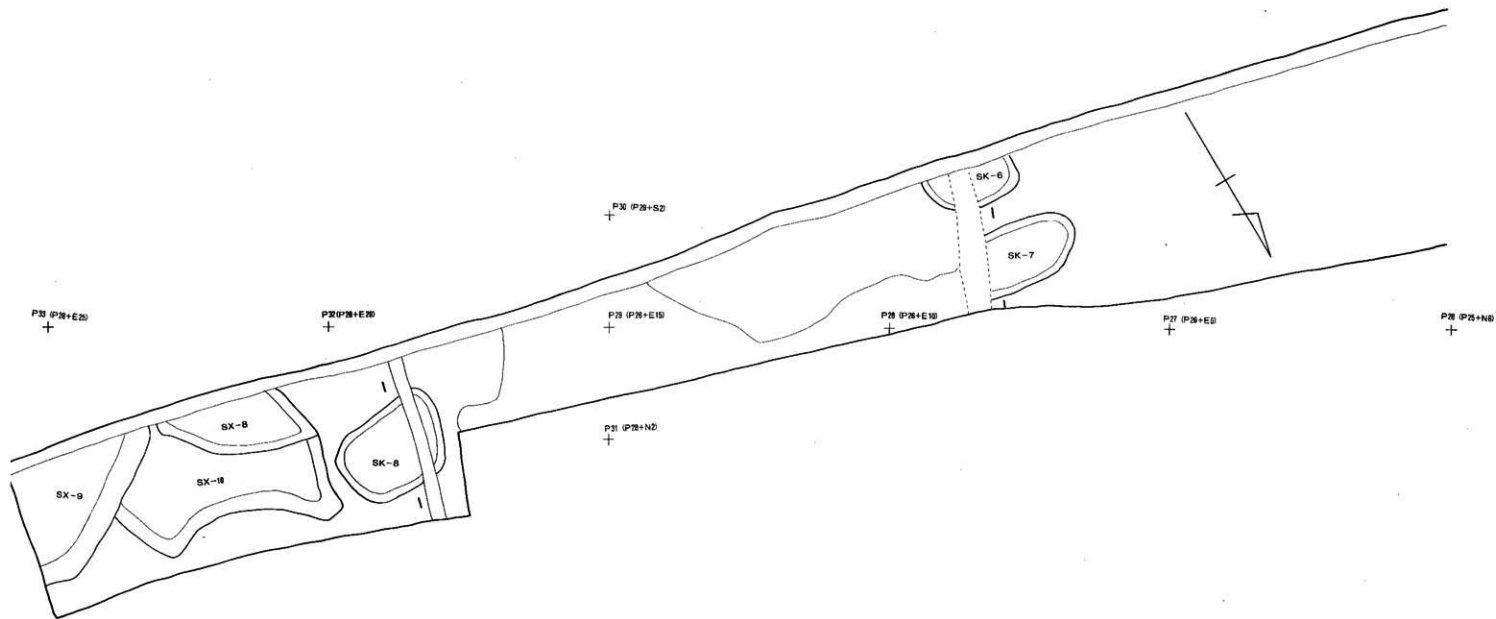


透槽平面实测图 (1)



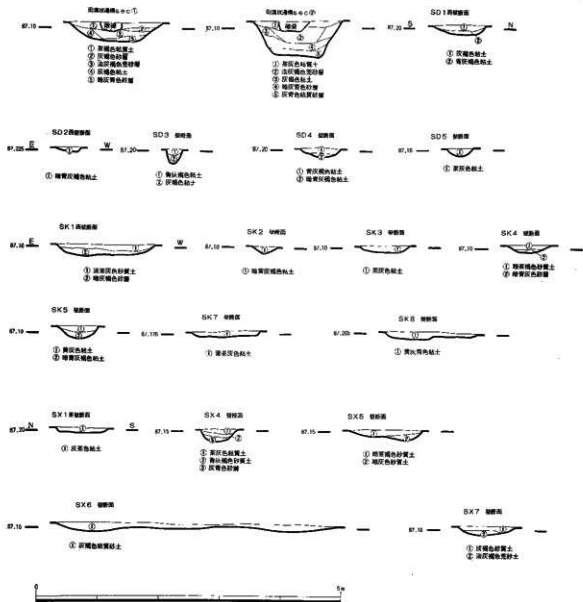


遺構平面実測図(3)



0 5m

遺構正面実測図(4)



各遺構断面実測図

昭和63年3月

— 県道片岡栗東線特殊改良第1種工事に伴う —

芦浦遺跡発掘調査報告書Ⅱ

編集・発行 滋賀県教育委員会文化財文化財
保護課

大津市京町四丁目1-1
電話 0775-24 1121

助滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大宮町1732-2
電話 0775-48-9781

印刷所 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
電話 0775 23-2580